山口県豊浦郡豊浦町川棚山田古墳※

国　分　直　一

Old Tomb of Yamada※

By

Naoichi KOKUBU

In course of the road construction, a part of the pre-sand hill earth was exposed. And at the foot of the hill of red soil, an old tomb was discovered at the east side of Yamada village, Kawadana district. The present paper is a report of my archaeological investigation on the old tomb site carried out in October, 1959. After clearing of the fresh sand filled in the stone chamber, considerable blocks of granite stone which seem to have been laid on the coffin were found on the chamber floor. Upon the floor no remains of coffin were found, but wares of Sue, Haii and iron weapons were found at the entrance part of the tomb.

A pebble found at the inner part of the chamber floor seems to have brought from sea shore.

From the tomb type of view, the old tomb of Yamada seems to be a later stage type of old tomb.

山口県豊浦郡豊浦町川棚字山田に横穴式石室が発見されたのは1959年10月である。旧北浦街道の東側に川棚駅と小串駅を結ぶ新道路開設が，当時山口県土木課の工事として進行中であった。山田集落の東側は砂丘であったので，砂丘がその東側において縦断されることになった。

そのため砂丘形成以前の地形の一部が露呈された。砂丘形成以前においても低い赤土の小丘地を成していたようである。その丘地の南東縁に横穴式石室が営まれていたのである。発見された石室はその丘縁に横穴をあけて造営されたものである。側壁および奥壁は荒く切った切石と礫塊（いずれも花崗岩）を組立て構造し，天井は羨道の上面を残して奥室の部分と玄室の奥半分を２個の巨石をもって覆うてあった。興味深いことは石室を中心にして，外囲をやや瓢形に造形していることである。もっとも石室の位置が道路の西端近くにあり，墳形の西側は切りとられた道路からはずれて，厚い砂丘下に埋没されたままになっていて，しかも地主側からも工事担当者からもより以上の拡大調査を行なうことについての同意がえられなかったために，全貌を明かにすることが出来なかったことは遺憾であった。然しながらほぼ左右シムメトリーに形成されたものらしいことはこの度の調査でほぼ想定出来た。

※ 水産講習所研究業績　第359号，1962年１月18日 受理.
Contribution from the Shimonoseki College of Fisheries, No. 359.
Received Jan. 18, 1962.

石室は羨道と玄室と奥室の区画のある横穴式石室で，大小の花崗岩の切石をもって組立ててあった。石室の入口は低地方に面し，石室の主軸の方向はほぼ北西から南東を指している。調査当時，封土は大部分削りとられ，天井石の一部が露出していた。人夫が鉄棒を天井石の間に挿入してこじあけようと努力したともきいた。従って封土の状況は明瞭でないが，約20〜30 cm 位の厚さの赤土をもって覆われていたようである。石室の全長は 4.65 m，奥壁の幅は石室床面において 1.03 m，奥壁は一枚の石で僅かに内側に傾斜している。両側壁は玄室から奥室にかけての部分は基盤に横に長い巨石を礎盤として用い，その上に，切石を大体において一重又は二重に組み，空間のある部分は更に小石塊をもって埋めている。なお羨道，玄室，奥室の境界に当る部分には縦に長いほぼ方形の巨石を柱状に立て，羨道，玄室，奥室の境界を明らかに構造している。羨道部における側壁は巨石の礎盤を用いず，不整形の切石をもって組立てていた。西側壁は上部になるに従って幾分持送り式の観を呈し，内側に内斜していた。高さは奥壁の部分において床面からほぼ 1.4 m，奥室と玄室の境界において 1.2 m，天井石の石室入口に向って，先端部において 90 cm。天井石は奥室を板状の巨石をもって覆い，玄室の上を断面楕円状の巨石をもって覆うていた。天井石は奥室から玄室に向って徐々に緩斜し，玄室を覆う天井石は羨道に向って下向きに急斜していた。

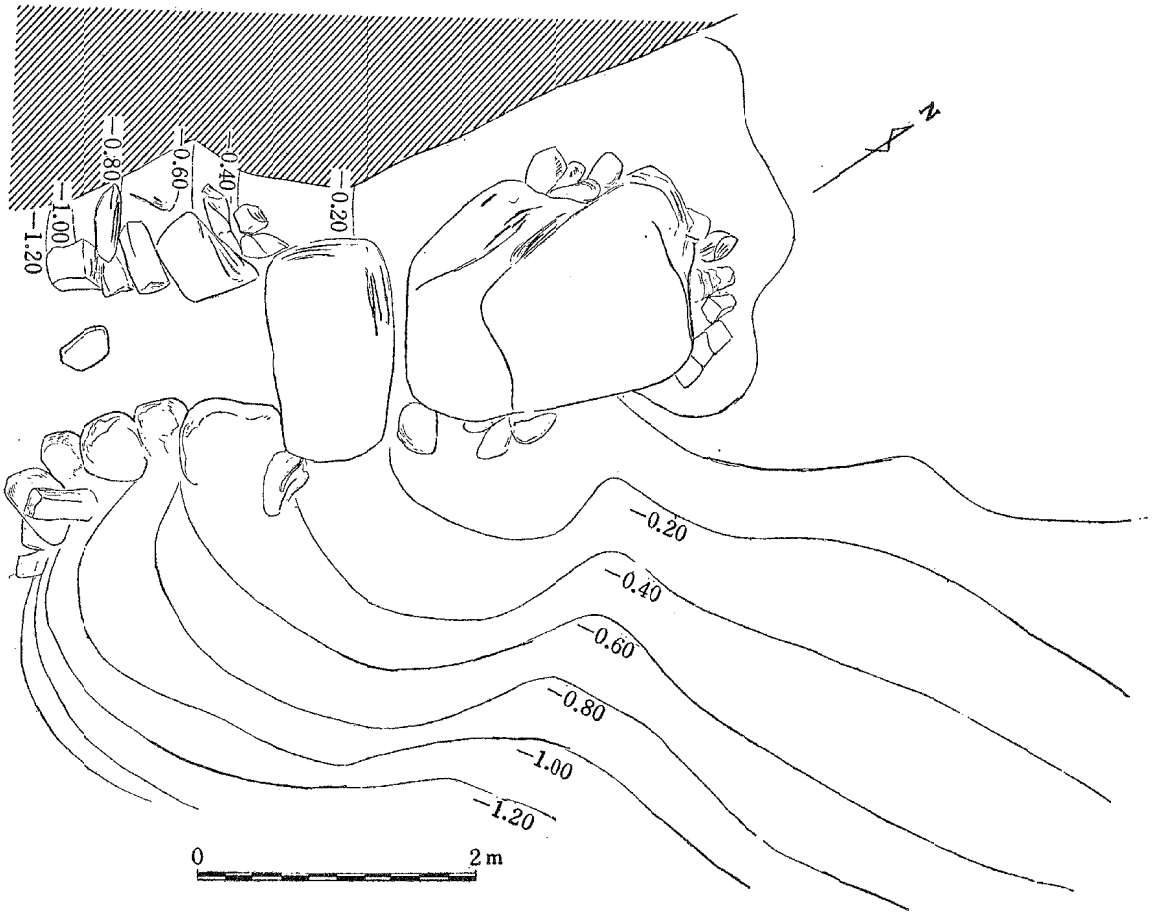


Fig. 1. Topographical chart of Yamada tomb.
Unearthed area

石室内は砂丘を形成している新鮮な砂によって埋積されていたが，砂を除くと，玄室から奥室にかけて不整形の花崗岩の切石又は礫塊が床面を覆うていた。これらの切石または礫塊は側壁からの転落ではない。側壁は完全に構築されていて，なんらの脱落のないことから見て転落でないことは明らかであった。従ってお

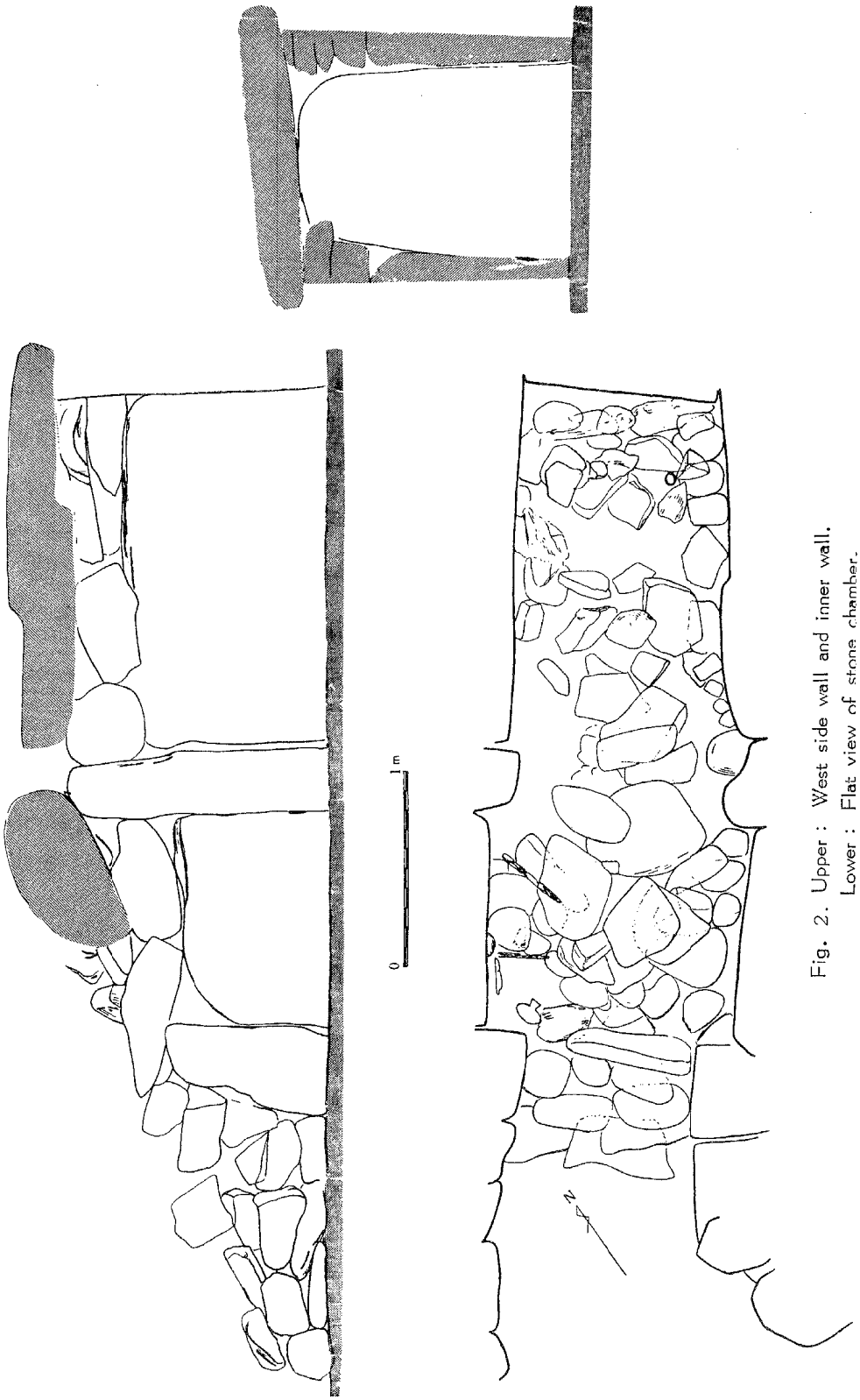


Fig. 2. Upper : West side wall and inner wall.
Lower : Flat view of stone chamber.

そらく木棺を覆うたものがその腐朽によって沈下又は転落して遺体を覆うに至ったと思われるが，遺骨は消失して何んらの遺片を留めていなかった。これらの石室又は礫塊を除くと奥室の周壁に沿ってやや扁平な敷石が敷かれていた。従って棺は赤土の直上に安置されたと見られる。然して中央部には敷石はなく，遺骨は完全に消失していたが，奥壁に向って頭部の西側に扁平の円礫が置かれていた。海辺の礫浜に見出されるものであることから見て，海辺からもたらせられたものであり，何んらかの意味をもっていたものであろうと見られた。

奥室には何んらの副葬品はなかったが，玄室の入口から奥に向って左側壁に近接して，床面に須恵器の平瓶と土師器の坏および鉄刀二口が見出された。その一口は側壁に直角に刀先を内部に向けて置かれ，他の一口は刀先を羨道の方向にして斜向するようにして置かれていた。

以上の状況を通して最も興味深く思われるのは石室内に見出された覆石である。箱式石棺又は木棺（推定）をやや扁平の切石をもって覆うた例は北浦海岸では槌栗浜の弥生式時代の埋葬地に見出される。その伝統は横穴式石室が登場するに至っても消えていなかったと見てよいものであろう。その伝統はその後も消えていない。安岡の潮待貝塚附近に発見された近世初期の火葬骨を壺におさめて再葬した墓域について見ると，遺骨をおさめた壺を巨石をもって囲み，海辺の扁平円礫をもって厚く上を覆うていた。かかる伝統は更に現代墓までひきつがれている。

PLATE

PLATE I

Yamada tomb

1 Tomb after the surface was removed away

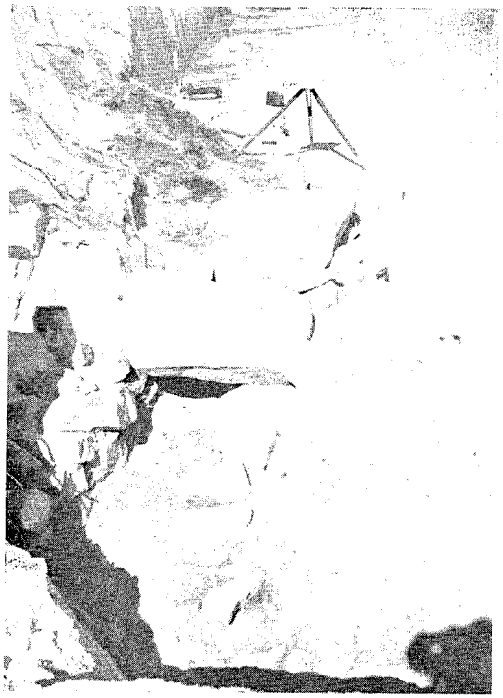
2 Heaps of stone at the center of the chamber

3 Excavated finds, wares and weapons

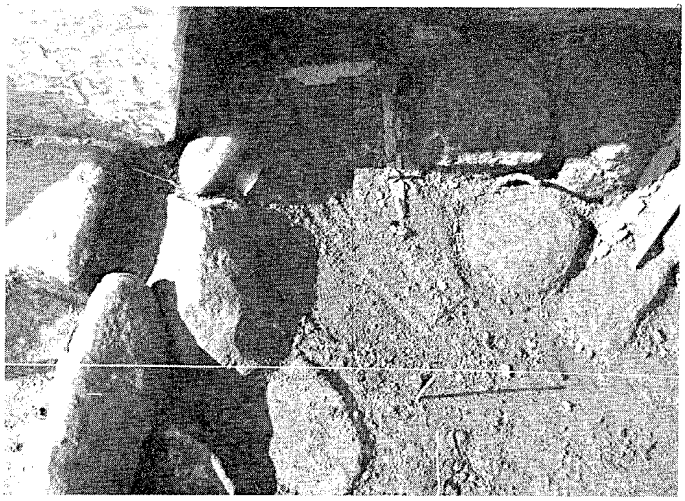
4 Floor of the chamber after the stones were removed away

5 Inner part of the chamber. A pebble seems to have brought from sea shore

PLATE I

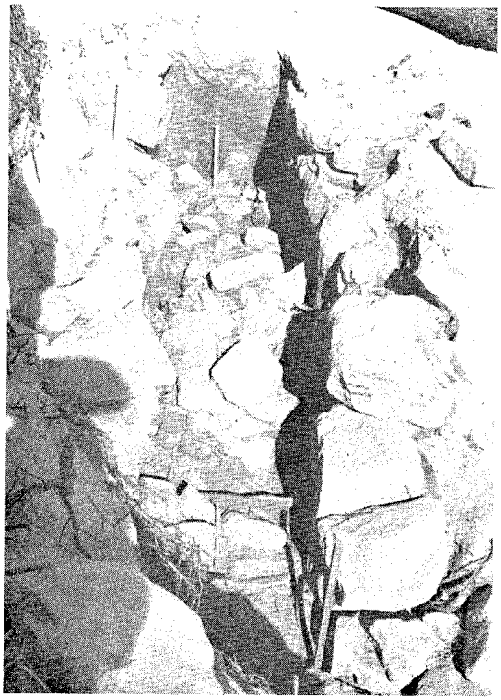


1

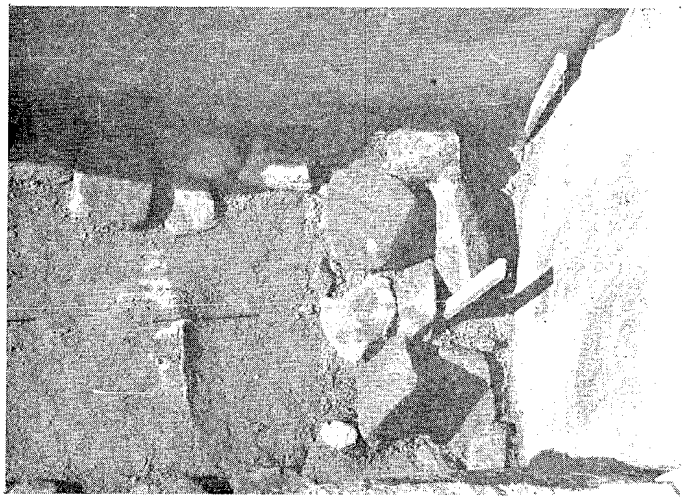


3

4



2



5